

比べるなら「過去の自分」と

一、二年の期末テストの採点が終わり、授業ではテスト返し真っ盛りです。いつもとは違う盛り上がりを見せるテスト返しですが、その光景を見ると、私は高校時代の一人の同級生を思い出します。その生徒はT君と言います。現在、四国にある大学の教授兼医師をしています。高校卒業後、彼とは全く会っていません。しかし、彼のことはずっと覚えています。

彼は恵那市の中学校の出身で、私は高校で同じクラスになりました。彼はそれまでに出会ったことがなかったタイプの人間でした。無口で、いつもおどおどしていたように私には見えませんでした。毎日ぼさぼさの頭で登校し、持ち物は数学の問題集と、むしって芯を出したような短い鉛筆のみ。教科書は学校に置きっぱなしでした。

授業中には、俗に言う「内職」(違う教科の勉強をすること)をしていることが多くあったように記憶しています。数学に対する興味関心が強く、いつも数学をやっているイメージがありました。

英語の授業の時です。長文を訳すようにT君が指名されました。いつものように、彼は数学の「内職」をやっていましたので、指名を受けてパニックになったようでした。隣に座っていた私は、彼に訳す箇所をこっそり教ええました。すると、先ほどまで数学をやっていた彼は、すらすらと訳し始めたのです。指名を受けた時に訳せるように、ほとんどの生徒は前日に予習をしていますが、彼はそれをしていません。訳す場所さえわかれば、英文だけみて訳せてしまう力の持ち主でした。

そんな彼です。中間や期末はもちろん、模擬テストをやっても、満点に近い点数ばかりでした。初めは彼に追いつけ追い越そうとがんばっていた仲間がいましたが、いつしか彼と自分を比較することに意味がないとわかったようで、だれも彼と比べませんでした。彼は東京大学の確か理科一類に進みましたが、大学を受け直し、大阪大学医学部に進路変更したと記憶しています。どこかで医者をしているんだろうなと思っていましたが、風の便りに四国の大学で教授をやっていると知り、検索してみました。その教授紹介欄には、大人になったT君の顔が写っていました。

勉強では足元にも及ばなかった私ですが、その時にこう思いました、「T君と同じ学校で学んでも、進む道が違うんだ。T君は医学の世界でがんばり、私は教育の世界でがんばろう。」と。

中学生の皆さんは、まだまだ周りの仲間が気になる年頃ですね。テストが返ってくると、仲間と比べたり、見せ合ったりすることも多いのではないのでしょうか。しかし、その仲間と同じ人生を歩くわけではありません。いつかは別れ、別々の道に進むはず。そう考えると、テスト結果を仲間と比べて一喜一憂することには意味はないと言えます。どうせ比べるなら、「過去の自分」と比べるべきです。その方がよほど意味があると思いますよ。

(二月二十一日記)